

第6回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

三粒の米

家森澄子・岡山県

昭和二十七年中学一年の秋のことである。

運動会を目前にして、一枚きりのブルーマが破れてしまった。帰宅して早速姉に買って貰おうと頼んだら、

「直ぐには買えないわ、お父さんの着物を解いて作るから今回はそれでがまんしてね」

こう言いながら、タンスからナフタリンの臭いのする父の着物を取り出してきた。布地はセルで色はグレーであった。

そのとき買って貰えない不満のうえに、色も気に入らなかった。

「ブルーマは、黒か紺に決まっているわ、そんなので作っても履かないから」

姉に向かって、はき出すように言い捨てて布団に潜った。布団に潜ると、いままでの剣幕とは裏腹に涙が堰を切って溢れ出た。

こんなとき、思い浮かぶのは両親のことである。父は昭和二十年に戦死、六年後母が病死した。十七歳の姉を頭に十三歳の私と九歳の弟の子供ばかりの家族になった。

そのとき、姉は、

「お父さん、お母さんは私たちに健康な体と、田畑と住む家を残してくれているわ、おじいさん、おばあさんに助けて貰いながら頑張ろうね」

姉のこの言葉を聞いて、どんなことがあっても姉を助けて頑張ろうと、思っていたのに何かにつかると、わがままを言ってしまう自分が悔やまれた。

布団の隙間から見える明かりは、まだ消えていない、掛け布団を少し持ち上げてみると裸電球の下で姉は着物を解いていた。よく見ると、袂を持つ右手の甲の上にキラッと光るものが落ちている。姉は泣いているんだ。

妹が欲しがるブルーマを買ってやれず、両親のことを思い出し、溢れる涙を止められないんだ。私と同じ辛さなんだ。私が姉を苦しめている。ブルーマの色なんか、どうだっていい、みんなと違う色のブルーマだって、運動会に出られないことはない、明日の朝、早速、姉に謝ろう。こう決心するといつの間にか眠りについていていた。

翌朝、姉の方から声をかけられた、

「澄ちゃん、桂君ちよつとここへ来て見てごらん」

いつもの朝食のお膳に向かうと、小さな皿の上に三粒の米があった、

「これ、どうしたん」

「お父さんの着物の左の袖の袂から出てきたのよ」

「どうして米が」

不審そうに訊く私と弟に、父との生活が一番長かった姉が、父との思い出を話してくれた。「お父さんは、この着物を着てお祭りに私とあんたを連れてお宮に参っていたのよ。そのとき左の袂からお供えの米を出していたわ、そのお米が残っていたのよ、きつと」

そう聞いて三粒の米を、父へのそれぞれの思いを浮かべながら頬に涙してみている姉弟。たとえ、三粒の米でさえ、父との思い出につながる大切なものなのだ。淡いかすかな思い出を、たぐり寄せるのだが、四、五歳の頃の思い出は鮮明にならず、涙となって頬を伝うばかりだった。

さらに姉はこの着物は父が一番好んで着ていたと、母が言っていたことも話してくれた。終戦後、物不足のときは、どこの家庭でも着物や、家財道具を持ち出して食料や、必要なものと交換していた。が、母は父子の縁の薄い子供たちに、せめて父の思い出のものは残して置いてやりたい。この思いから、父の遺品は大切にしまっていた。

「だからこんなときに、着用を使わせて貰えるのよ、ありがたいと思わなくてわね」

姉の言う通りである。父の着物の袂に残っていた父の触った三粒の米にさえ、愛おしさや懐かしさを覚えたではないか。父の着物でブルーマを作って貰えることは、この上ない幸せなことなんだ。

「姉ちゃん、我が儘言っでごめんなさい」

「分かってくれたら、それでいいのよ」

翌日、学校から帰って見ると、グレーだった着物の布地が、黒に染められて竿でひらひらしていた。それを見て嬉しくて、

「やあー布って色も変えられるんだ、私の望み通りの黒のブルーマになる」

姉は微笑んで、破れたブルーマを見ながら、布に鉄を入れ、ミシンをふみはじめた。

朝、目覚めると枕元にアイロンの掛かったブルーマがおいてあった。早速、足を通してみると、ぴったりで、履き心地もよく、鏡の前で走るポーズをしてみると、かっこよく、

「姉ちゃん、ありがとう、売ってるのよりもかっこいいよ」

「気に入った、明日から父さんも一緒だよ」

三粒の米が教えてくれた、親の心と、布の使い回しのできる便利さを。